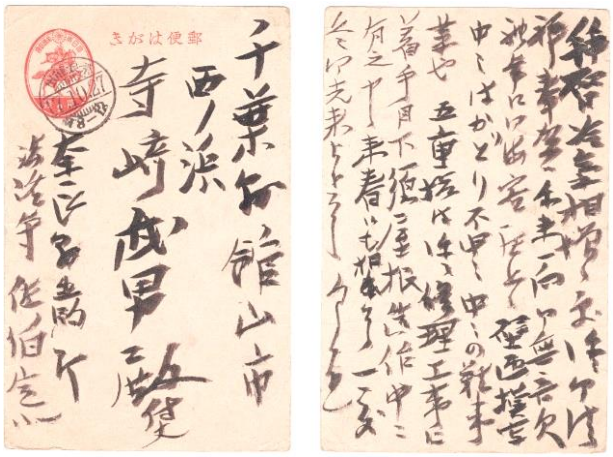
法隆寺管主・佐伯定胤上人との交流

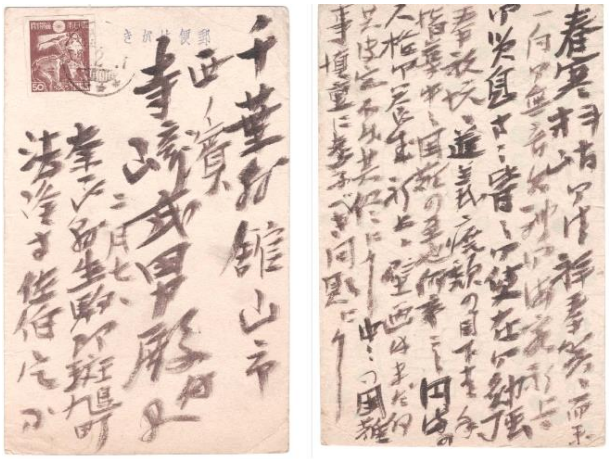
寺崎は東京美術学校時代より佐伯定胤管主を師と仰ぎ、金堂壁画と唯識論を学び、壁画研究と交流を続けてきたという。法隆寺出火前の大修理に難渋している様子がうかがえる管主のハガキが見つかった。



佐伯定胤→武男（館山市西ノ浜）

1942(S17).10.27　【法 1】

拝啓冷気相増候処、弥々御清福奉賀候、尓来一向御無音欠馳走に御海容願上候、壁画模写中々はかどり不申候、中々の難事業也、五重塔は弥々修理工事に着手、目下瓦屋根造作中ニ有之申候、来春にも相成候、一度冬御光来被下度候、草々不一

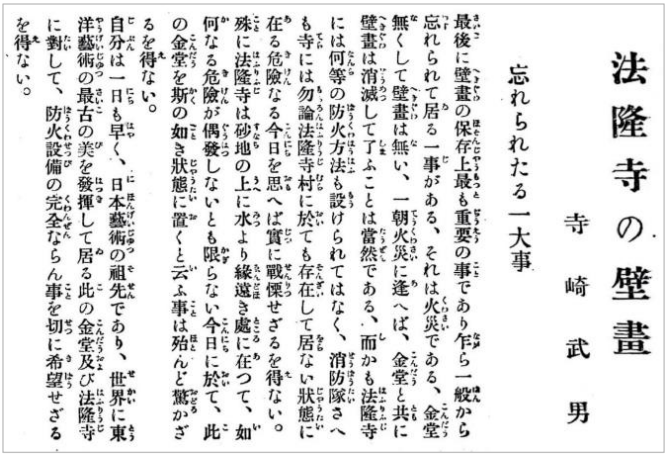


佐伯定胤→武男（館山市西ノ浜）

年不明 2 月 7 日　【法 2】

春寒拝啓御清祥奉賀候、而来一向御無音欠礼御海容願上候、御賢息方々皆々御健在御勉強奉祝候、道義廃頽の目下者手指集中ニ困難の至也、何卒ニも円海の人格御養生祈上候、壁画はまだ何共決定不仕其侭に候、中々の困難事慎重に考ふべき同題に候

▲法隆寺輪堂壁画を制作中の寺崎武男



法隆寺の壁畫

寺崎武男

忘れられたる一大事

最後に壁畫の保存上最も重要の事であり乍ら一般から忘れられて居る一事がある、それは火災である、金堂無くして壁畫は無い、一朝火災に逢へば、金堂と共に壁畫は消滅して了ふことは當然である、而かも法隆寺には何等の防火方法も設けられてはなく、消防隊さへも寺には勿論法隆寺村に於ても存在して居ない狀態に在る危險なる今日を思へば實に戰慄せざるを得ない。殊に法隆寺は砂地の上に水より緣遠き處に在つて、如何なる危險が偶發しないとも限らない今日に於て、此の金堂を斯の如き狀態に置くと云ふ事は殆んど驚かざるを得ない。

自分は一日も早く、日本藝術の祖先であり、世界に東洋藝術の最古の美を發揮して居る此の金堂及び法隆寺に對して、防火設備の完全ならん事を切に希望せざるを得ない。

▲法隆寺火災を危惧する大正期の論文

『書道及画道』第 4 巻第 9 号

▲法隆寺金堂壁画の複製